

フィリピン人の貧困

玉城恒美

初めてフィリピンを訪れたのは一九九五年二月であった。ニノイ・アキノ国際空港ではアジア特有の熱風とともに人の熱気に圧倒された。そして、車で空港からマニラ市内へ向かう途中、私は信じられない光景を目にした。渋滞している道路で車と車の間を子供達が手にした煙草や新聞、花を売りに来る。なかには、幼い妹を背中におぶってお金を無心に来る子もいる。

なんとという光景だろう。なぜ、子供達が危険を冒して道路上で物売りをしなければならぬのか。聞いてはいたが、現実目の当たりにした物売りをしている子供達の存在は、私にとって衝撃的であった。

* * *

二年後の一九九七年、再度フィリピンを訪ねる機会を得た。その時は、ルソン島北部の都市バギオを訪ねた。バギオは夏でも涼しくフィリピンでは避暑地として知られている。ストリートチルドレンを見かけることはなく、安心して歩けるきれいな町である。バギオは、ここもマニラと同じフィリピンかと思わせる都市であった。

二回目の訪問で、フィリピンには路上やスラムに住む貧しい人々だけでなく、中流階級の人々の生活がある事を知った。国が豊かになれば貧しい人々の割合も徐々に減

り、中流階級の割合が増えるのであろう。同世代の州政府職員との会話は、ストリートチルドレンやスラム街がフィリピンから早晩なくなることを期待させた。

* * *

一九九八年二度目のフィリピン訪問で南の島を訪ねた。日系企業へのヒアリングは先方の指定でその地域の高級ゴルフクラブで行った。その時、たまたまその地域の電力会社の社長と同席になった。日に焼けたラテン系のスマートな顔立ちは、アジア人ではなくヨーロッパ人としても十分に通用する紳士である。州知事、市長も彼の一族で占められている地域の名士である。多少誇張もあるが、この地域の政治、経済、ビッグビジネスすべてがこのゴルフクラブで決まると言う。上流家庭に生まれ、裕福に育ち、最終学歴はヨーロッパの名の通った大学である。その地域の基幹産業をがっちり押さえ、額に汗してガツガツ働くことはない。自ずと世界観、社会観、人生観、人間観が中流家庭で育ったわれわれ多くの現代の日本人とは異なる。インタビュを終えドライバーに名刺を出してこの人を知っているかと訊ねたら、もちろん知っているとの答えが返ってきた。続けて彼は、金

持ちの男性と心やさしい貧乏な美しい女性

が結婚するのは映画の世界のことだけであって現実の世界ではあり得ないと笑って言う。両者には厳然とした区別があり、混じり合うことはあり得ないと言う。フィリピンには、一方に貧困にあえぐ多くの人々がおり、他方でわれわれとは比べものにならないほどの裕福な人々がいる。

* * *

両者とも人間には二種類あると疑いなく信じている。

私の目からは路上で金を無心する子供達は心を痛める存在であるが、違う社会観、人間観を持っている人の目には、それは心を痛めるとか同情心を起こさせるとかの存在ではなく当たり前の風景としてしか映っていないのかも知れない。また、貧しく暮らす人々もそれを当たり前のことと思っているのかも知れない。

善し悪しは別として、そのような価値観の存在は、三年前初めてニノイ・アキノ国際空港からマニラへ向かう途中で見たストリートチルドレンの存在以上の衝撃を私に与えた。

(たまき つねみ／研究企画部研究事業開発課主任)